

中国秋季リーグ戦男子 1 部 Second stage 結果報告

広島大学体育会バレーボール部同窓生の皆様

(同窓会連絡フォームへ登録いただいた皆様及び同窓会やコートの仲間等でご連絡いただいた皆様へお送りしています。)

いつも大変お世話になっております。

広島大学体育会バレーボール部です。

10/18～19 に東亜大学体育館において、中国秋季リーグ戦男子 1 部 Second stage が、環太平洋大学体育館において、女子 1 部 Second stage が開催されました。

広島大学男子の結果は、以下のとおりです。

vs 東亜大学

●1-3 (24-26、25-17、18-25、15-25)

vs 山口大学

○3-0 (25-21、25-19、25-19)

vs 広島経済大学

○3-2 (26-24、22-25、24-26、25-21、15-12)

(中国学連 HP)

<https://chugoku.hiroshima-u.ac.jp/league-aki-top.html>

お互いがたっぷり四つの広島経済大学戦は、両者取っては取られを繰り返す、まさに一進一退の攻防戦。湿度が高く、ワイピングの応酬で最終試合の終了が 20 時前になった前日からは少し和らいだものの、この試合も曇天の中で 2 時間を超える大熱戦。実力差が拮抗してフルセットになること自体はよくあることですが、5 セットもあれば大体はどこかで一方的な展開になる通説を覆し、次の一点がどちらに入るか分からない展開を、最後まで続けた両チームのしのぎを削る戦いぶりは、意地と意地がぶつかり合う本当に素晴らしいものでした。誰一人集中力が切れることなく、お互いがお互いを好敵手と認め合い、相手を倒すと言うよりは、共に高め合ってきた成果を披露しているように見えました。どのセットも 20 点まではほぼ点差がなく、最終セットも広大は序盤の連続失点で先に 8 点のコートチェンジを取られながら、最後の 5 点勝負で見事に試合をひっくり返しました。バレーボールにおける最後の 5 点と言うのは、本当に練習に練習を重ねてこないと取れないもので、攻める姿勢、冷静な判断力、高いパフォーマンスを発揮でき得るフィジカル、まさに、心技体が問われた究極の数分間で、広大が相手を上回ったことが勝因なのだろうと思います。最後のセットが

始まるときの円陣で、「自分たちはここで勝つためにやってきた」と一切の不安がなく、全員が自信に満ち溢れた表情をしていたことがとても印象的でした。人々が驚くような結果は、誰からも評価されないような地道な努力の積み重ねによって生まれます。2年ぶりの経大戦2勝には、それだけの時間を費やしてきた陰の頑張りを感じずにはられません。

春リーグであれば、新チームとして初めての公式戦になるので、試合を重ねるにつれてチーム状態と経験値が上がっていくものですが、秋リーグは夏を越えてほとんど仕上がった状態で開幕を迎えるため、最終週に向けてさらに上がるチームと言うのはまずなく、開幕時の状態をどれだけ維持できるかが問われます。広大も開幕週ほどの状態ではなく、授業再開と長距離遠征によるコンディション不良、蒸し暑い体育館ならではのボールコンタクトミスが目立ち、決して万全の態勢で経大戦を迎えたわけではありませんでした。しかし、特に4年生の調整力が素晴らしく、まずは水谷（三重・松阪高校）が土曜日と日曜日では別人のようで、攻守で跳ねるようにチームを牽引した活躍ぶりは今までで一番と思えるほどでした。続いて両センター、佐々木（佐賀西高校）はキャッチが乱れる中でも安定した攻撃で常に相手ブロッカーを引き付け、ラリーが続く苦しい場面ではシャットで何度もチームを救いました。最終セットでは13-11の場面で速攻を決めて試合を決定づけるなど、終始落ち着いたプレーが光り、一緒にコート内にいた選手からすると頼もしくて仕方がなかったことと思います。また、鎌田（愛知・名東高校）は1セット目終盤からの出場となりましたが、自慢の耐空力を生かした緩急をつけた攻撃は相手も味方も驚かせ、サーブやネット際の細かいプレーも非常に丁寧で、勝利につながる大きな原動力となりました。難しい試合を勝ち切るためにはラッキーボーイの存在が必要で、鎌田は間違いなくその役割を果たしていましたが、それは偶然やラッキーではなく、力を発揮するための鎌田のきめ細かな準備があったからに他なりません。

そして、この二人に幾度も助けられながら、ゲームポイントのパイプ攻撃を1本で決めたのがエースの山下（広島・安古市高校）でした。相手のマークが厳しくなりシャットされる本数が増えたからこそ感じたのは、2本連続では絶対に止めさせない、類まれなる諦めの悪さと緻密な修正力です。スパイカーは1本止められると、2本目は置きに行ったり、決めるのではなく崩すことに切り替えたりするものですが、見ている人たちが山下を絶対的なエースと感じる理由は、2本目も決めに行ってくれることにあると思うんです。もちろんトスの状況もあるので必ずではありませんが、決めに行く姿勢がチームを前向きにさせているのは間違いありません。スパイクを打つときには目をつぶる選手とそうでない選手がいますが、後者の山下は相手の動きを本当に良く見ていて、ブロッカーの手の位置もしくは指先まではっきりと見えているのだと思います。必ずコートの中で勝負をするので相手ブロッカーが駆け引きで手を引くようなことは一切なく、正々堂々と真正面から勝負するからこそ多くの人たちを引き付け、その期待がまた本人の成長につながっているのだと思います。

バレーボールを知っている人でも知らない人でも、一度会場で見ればその魅力を感じずにはいられないプレーヤーなんて早々いませんので、最終週の地元・広島ラウンドでは 4 年間の集大成として、たくさんの人たちの目に焼き付けさせるつもりで頑張って欲しいと思います。コートの外でも、アップゾーンから声でチームを鼓舞する加藤（愛知・安城東高校）、仕事人として苦しいときにサポートできる土屋（広島・安古市高校）、中国学連委員長として大会運営を担う和田（広島・賀茂高校）、同じく学連委員として支える妹尾（京都・綾部高校）、周りがよく見えていて突っ走りがちなチームのブレーキ役も務めるマネージャーの鶴田（兵庫・神戸高校）と、4 年生 9 人がそれぞれのポジションでリードしてくれていますので、残り 1 週となった 4 年生との最後のリーグを全員が悔いなく過ごして欲しいと思います。

東亜大学戦は、もはやセットを取るのが当然のチームレベルにあり、お互いに低調なスタートとなった土曜日は勝ちまで意識できる展開でしたが、翌日に目標の経大戦を控えていたことを考えると、互角にサイドアウトが取れていた序盤の内容が収穫だったと思います。サーブミスが目立ち、サーブで攻められなくなったことで途中から防戦一方の展開になってしまいましたが、強いチームに勝つためには、まずは精度の高いサーブが不可欠です。また、1 セット目の最終盤で、川村（1 年・東京・日本大学第三高校）に任したトスは結果にはつながらなかったものの、このチャレンジは間違いなくやって良かったと言えるときがやってきます。次戦は秋リーグ最終日の 2 試合目ですが、この組合せは度々波乱が起こる魔のカードです。1 位チームとの対戦を控えてすんなり勝ちたい 2 位チームと、順位が確定して失うものがなくなり最後の力を振り絞って向かってくる 4 位チーム。山下を止めに止めた選手は 2 週目最終戦の怪我で交代が想定され、前回とは全く異なる試合展開になるはずです。後は広大がもう一度コンディションを整えて、相手に合わせることなく自分たちのバレーボールを貫くことができれば、初めての景色を見ることもそう遠くありません。ここまでの 6 試合がそうだったように、出場選手全員の調子が良いことは中々ありませんので、お互いにカバーし合って、個の力ではなくチームとして戦う姿を会場にいる全ての人たちに見せつける気持ちで、最後の山場をチーム一丸となって乗り越えましょう。

今週末は、広島県猫田記念体育館で男女 1 部 Final stage が行われます。
引き続きよろしく願いいたします。